氏名	長澤　耕平
ヨミガナ	ナガサワ　コウヘイ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第472号
学位授与年月日	平成27年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉　“フロウ”する身体としての都市 〈作品〉　ある都市の肖像

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	関　出
（論文第１副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	佐藤　道信
（作品第１副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	梅原　幸雄
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	齋藤　典彦
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	植田　一穂

（論文内容の要旨）

rational（理性あるいは合理主義）の語源がratio（比率や割合）であるように、現代における最も支配的な思考である科学的合理主義とは、物事をそれ以上分割不能なところまで分割し、その再構成によって世界を記述しようとする態度である。そして分割の行き着く果てには、常に境界的な存在という問題が立ち現れる。有と無、生命と非生命、生と死、想像と現実など、事象の境界は、突き詰めるほどに無化、曖昧化していく。

絵画表現においても、科学と方法は違っても、世界をいかに記述するかということを問題にしている点では同じである。そして、絵画表現において、普遍性を追求しつつ現代的な鮮度を保つ方法を探ろうとする時にも、やはり物事の境界に対して意識的であることが鍵になるだろう。

現代社会では、交通の高速度化、情報通信技術の発達がもたらしたグローバル化、ボーダーレス化によって、多様な価値観の存在が認識されるとともに、人種、民族、文化的共同体間に起きる摩擦、衝突、矛盾が顕在化している。一方、インターネットの普及やマスメディアによって、価値観の均質化も平行して進んでいると見ることもできる。こうした問題は、オリジナリティの維持あるいは創出といった制作者としての根本的な課題に関わることである。そしてそれらは、全て境界面の問題として捉えることができるだろう。現代の渾沌と混じり合う世界の中に生きる我々は、常に様々な境界上に存在していると言える。

そうした状況の中で、どのような態度をとるべきなのかを考えた時、私は、境界的なあり方を自覚し、個別の秩序を併存させたまま受容することで、その境界上で“ゆらぐ”ということがひとつの解答になるのではないかと考える。“ゆらぐ”ことは、二元的な世界を二元的なまま受容することであり、双方の世界を自由に行き来できる身体性を獲得することである。そして私はその“ゆらぎ”を持つことこそが現代的な豊かさであると考える。

本論文は、複数の異なる秩序の隣接、混淆に対して、それらを均質な価値観の上に統合するのではなく、併存させたまま拮抗させたときに生じる“ゆらぎ”を、絵画的価値に転化させるための試みと考察である。

具体的には、菊地成孔の「フロウ」の解釈を援用した。「フロウ（flow：流れる・湧き出る）」とは、ヒップホップの用語であり、一般的にはラップの節回しや流れを意味しているが、そこから拡大解釈され、ラップの個性など、ある価値を含んだ概念として理解されている。その中で菊地は、ポリリズム、多言語といった、内在的な分離の状態あるいは併存する複数の秩序を、単一的に表現しようとするときの「ゆらぎ」や「訛り」が喚起する官能性や高揚感を、「フロウ」としている。

私は、菊地の解釈による「フロウ」の構造を、絵画に応用することができると考え、都市をモチーフとし

た作品制作として実践した。

都市は本質的に、リアルとバーチャル、人為と自然、自己と他者等、多義的な境界性を孕んでおり、それらの境界上で“ゆらいで”いる。それゆえに“ゆらぐ”ということが現代的、かつ根源的運動を象徴し、かつ絵画的表現として昇華するために適したモチーフであると考える。

第一章では、都市をその起源から概観することで、都市はその本質に、共同体間の境界としての側面と同時に、人間と自然（あるいは神々）の境界としての側面を持っていることを述べた。加えて、現代においては複雑化した社会制度や、電子通信機器の発達によるネット空間などの「バーチャルな世界」が、実際に触れることのできるフィジカルな世界に対して同等の存在感を示すようになっていることに触れ、都市がリアルとバーチャルの境界でもあることを論じた。そして、都市には境界的であることから生じる“ゆらぎ”が、その外形に表れていることを示した。

第二章では、“現代の都市に生きる我々は、複数の世界に制約されていると同時に、複数の世界に向かって開かれた境界的な存在である”という前提に立ち、都市の“ゆらぎ”とそこに生きる我々の“ゆらぐ”身体性を、「フロウ」へと転化する具体的な過程について述べた。

第三章では、第一章、第二章を踏まえ、過去の自己作品との照応関係を見ていくとともに、その集成である提出作品「ある都市の肖像」を解説した。

（論文審査結果の要旨）

都市は自己と他者、人為と自然、リアルとバーチャルが交錯する現代社会を象徴する場である。本論文は、その都市に生きる我々の現代的な豊かさとは、二元的世界をそのまま受けいれ、その境界上でゆらぐことだと考える筆者が、都市を巨大な一つの身体と捉え、身体としての都市のゆらぎを表現しようとする試みを論述したものである。タイトルの“フロウ”とはヒップホップ用語で、ポリリズムやポリリンガル化など、リズムをずらすことで官能性や高揚感を生み出す音楽の手法であり、それをここでのゆらぎの表現に援用したものである。

筆者は、都市を高高度の上空から俯瞰した作品を描いているが、情景としては川や水路、港など、都市の境界面を多く描いている。第1章では、まず「都市」が、政治の「都」と交易の「市」の合成語であり、市は交通の要衝、つまり道や水路が交わる境界上に成立する高エネルギーをもつ場であること。そして日本の都市は、むしろこの市の性格を歴史的に強く引いていることを確認する。第2章では、“フロウ”の理論を説明した上で、その絵画への援用として、具体的には箱型の建物の反復描写を、規則的なリズムやビートとしてではなく、不規則に少しずつずらして描いていること。また実際には航空写真を使って描くのだが、その際、描く地域を実際に歩いて取材し、スケッチと同様に身体化した上で描いていることを述べる。そして第3章で、筆者のこれまでの作品と、今回の提出作品について解説している。

筆者は、地上から水平方向に見た都市の風景も描いている。そこではビル群を、木が林立する森に見立てているが、不可避的に垂直の方向性が強調される。それを上空からの俯瞰図に変えたのは、スプロール現象で無秩序に拡大する市街地の様子が、粘菌の増殖や、動脈から毛細血管に展開する血管にも似て、より生物の身体活動を感じさせるためだったようだ。提出作品は、複数の作品ではなく、銀座・築地から馬喰町・日本橋辺にいたる地域を、巨大な画面一点に描いた力作である。整然と区画整理された地域ではなく、江戸の最も古い地域を選び、全体の構図を決めてから細部を描くのではなく、中心を持たない細部の反復として、端から少しずつ描いていったらしい。そうすることで、ズレを生じさせたのである。

本論文は、都市論と同時に身体論であり、両者を結びつけることで、都市に生きる現代の人間のあり方と可能性を絵画表現として模索した、独創的な視点の論考になっている。論文発表会には、立ち見の人々も多く出るなど沢山の観衆が集まり、彼の作品、論文への注目の高さが窺われた。読みやすい文体による丁寧な論述展開は、筆者の考察を十分に伝えるものになっており、優れた学位論文として審査会の高い評価と承認を得た。

（作品審査結果の要旨）

申請者は学部・大学院を通じて、都会の風景を描いている。本作品は“フロウ”する身体としての都市と題して、彼独自の思考を詩的、音楽的な解釈をくわえながら表現したものである。ジャズミュージシャン・著述家の菊池成孔氏が著述する「フロウ」（流れ・湧き出る）のラップの節回しや流れの個性、価値を含んだ概念から感じる官能性や高揚感を絵画表現の中で捉え、活かそうとしている。

学部、大学院修士において申請者が描いてきた都市は人の目線で捉えられている。中でも高層ビルの連立した大都市のイメージとその形態における各家々のしきり、多くの窓を奥行きとしてとらえた形態の中に無限性と人々の生活する様子をもリアルに描き出そうとする熱意ある絵が多かったように思う。

大学院博士課程に入り視点を広げ、鳥の目線で空から見下ろした都市風景への表現に変化している。ゆらぎの意識が取り入れられ都市の一区画を広く捉え、川、道路、海との境界をゆらぎの対象として申請者自身の足で描こうとする。区画を全て歩いて、目による素描をしてから、構想及び構図を考え、下図づくりをしているという。素描の大切さを常に考えながら、形を創作していく作業の中に音楽的な考えや、崩れているようで崩れていないぎりぎりのところを官能的（エロティック）と述べ、そのような意識を取り入れている作品が多く制作されている。そのことが申請者の作品に写真ではない特別なリアル感を増す不思議な魅力を持たせている。

提出作品「ある都市の肖像」(260.0×576.0cm) は、今まで描いてきた都会の風景の集大成といえる大作で「ゆらぎ」や「訛り」の喚起する官能性や高揚感を作品上に反映させた作品となっている。博士展において野村賞にも推薦され申請者にとって記念すべき秀作である。今後の制作において、より大きなゆらぎがあればより進化した魅力も増すと思われる。次作に大いに期待したい。

審査会において審査対象の作品は一貫した研究の蓄積による成果が示され、絵画表現において優れており、水準に達しているものと全員が判定した。

（総合審査結果の要旨）

申請者は長らく「都市を題材とした絵画表現」と取組んできた。以前は、水平方向に見渡す構図で、遠くに並び立つビル群のそれぞれに窓の集積を描き込み、鏡のような水面に反映する静かな都市風景を描いていた。その後、都市を身体として空間的、時間的に巨視するために、はるか上空から捉えた地域の変容を身体の運動とみなし、より大きな秩序を見いだそうと自己の絵画表現を追究してきた。一連の作品は、ほとんどが都市の成立と関係のある海や川、水路、運河、河口といった境界的な水際の姿を、密集する家並や交差する道と共にモチーフとしている。それは現代社会のもつ多義的な要素や、都市が含む二元的世界をそのまま受け入れ、境界上でゆらぐことが都市に生きる充実に通じると考えたことが、動機となっているようだ。都市は急速な変化に富み、無秩序に拡大する様子には人為と自然との不規則なゆらぎとともに、あたかも生物的な身体活動を連想させると論文でも述べている。

申請者は、音楽表現における「ゆらぎ」や「ずらし」からも示唆を受け、その発生を目指している。特に自身の絵画への応用を試行した“フロウ”は音楽概念として、複数の秩序を単一的に表現しようとするときの「ながれ」のほかに、「あふれる」をイメージとする解釈を援用しており、そこにこそ興味と価値を見出しているといえよう。近年の絵画表現においては、一貫して広域を俯瞰する構図で、説明描写となる陰翳や透視図法的な遠近感も持ち込まず、絵画内に“フロウ”の発生をねらうと言う。絵画組成の見地に立てば、和紙を基底物(支持体)にして岩絵具で彩色しており、またほとんど全ての作品に銀箔を用いている。物性として化学的な影響を受けやすい銀箔は、硫化が進むなど画面上では経年の挙動経過において、漸次どのような変化をたどるのかは関心事である。

制作手法として、絵画表現する対象の実地取材に時間をかける。「運河」(2013)では、港区芝浦周辺を歩き回った実感を支えにしている。画用紙を地面に、ペンを足に置き換えた写生であると疑わない申請者は、都市を自己の身体に内部化し、歩き回る際の官能を絵画に“フロウ”の出現をもって固定しようと試みている。

俯瞰資料を手元に、家並の形象を根気よく積み重ねていくことで、息づく都市を立ち上げる。提出作品「ある都市の肖像」は、研究の集成とする大作(260.0×576.0㎝)となった。東京都中央区の街並みをグリッドとして、反復するリズムと共に圧倒的な量を描き込むことで“フロウ”の生成を意図した力作と評価する。

平成26年12月22日の「博士審査展・論文発表会」の終了後に、審査委員全員による試験（口述）を実施した。論文及び作品の主旨や研究の経緯に関連した試問の結果、申請者の理解力や知識が研究成果として十分身についていることを確認し、その内容が学位取得に相応しい水準に達しているものと認め、合格と判定した。